
俺ののびのび人生を返せ！

坂田銀時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺ののびのび人生を返せ！

【Nコード】

N6302P

【作者名】

坂田銀時

【あらすじ】

これからののびのびとした俺の高校生活は、ある一人の少女によって打ち消されたのであった。中野沙紀が起こす波瀾万丈な出来事に俺は付き合わされることになる。

俺ののびのび人生を返せ？

ある一人の少女が須崎商業高校に入学した、その名は中野沙紀。同じ市にある朝ヶ丘中学校を卒業しこの春から須崎商業高校に通うことになった。はじめて見た時はまるで絵に描いた美少女で一見性格も穏やかなものだろうと思っただが、そんな事を思っていた男子生徒はこの後の衝撃的な言葉でその思いは消されたのであった。

それは入学式の後、生徒全員が自分たちの教室に戻り俺たちの担任の山田教諭が

「それじゃ、みんな知っている人がいるかもしれないがまだ知らない人もいるかもしれないからさっそく自己紹介をする出席番号の順で回っていくそれじゃ中山君から」

「はい、えゝ須崎中学校出身中山良仁です。特技は……」

といいながら自己紹介が始まった、そして

「これから一年間よろしくお願いします」

と俺は自己紹介を終え、拍手が鳴りながら俺は席に座った、そして次の人はあの衝撃的な言葉を放ったあいつだった。

「朝ヶ丘中学校出身中野沙紀、私はつまらない人は嫌いです、この中で自分は面白いと思ったら私のとこまで来なさい！！」

教室は騒然とした空気になった、それまでの楽しい空気が一瞬で壊されたのであった俺は後ろを顔を後ろに向けた中野は、騒然とした空気になった教室を見渡しは席に座った。それを見た山田教諭はすかさず

「それじゃ、次の人行こうか」

「はい、朝ヶ丘中学校出身久保です。趣味は……」

席に座った中野はどうとうと手を組んで椅子に座っていたそして中野はほかの奴らが自分を紹介をしている間ずっとそのまんまだった。こうして俺と中野は出会ってしまった、俺はまだこれから起きる波瀾万丈なことになるとは思っていなかった。

俺ののびのび人生を返せ？（後書き）

はじめまして、坂田銀時です。今回の回はプロローグみたいなものです。今回の作品の舞台は、自分が住んでいる須崎市が舞台となっています。どうぞこれから「俺ののびのび人生を返せ！」をよろしくお願いします。

次回投稿は、分かりません。

俺ののびのび人生を返せ？

入学式の翌日、俺は昨日のあの中野が言った衝撃的な言葉を聞いて俺は中野だけには話したくないと思っていたのだが、朝、学校に行って教室に行くと俺の後ろの席には中野が堂々とまっすぐ向いて座っていた。そして自分の席に座ってかばんを横にかけて俺はすることがなかったからそのままいたらよかったのが、俺はなぜか中野に話しかけていた。

「なあ、昨日のあれ本気なのか？」

「昨日のあれって？」

「いや、なんか面白いやつはいないかどうかどうたらこうたら。」

「あんた、なんか面白いことできんの？」

「いや、できないけど。」

「けど、何？」

「いや、なんでもない。」

「じゃ話かけないで！！」

と中野に言われてしまった、俺の周りにいたやつらは「やっぱりな」という目で見ていた。俺の周りにたやつらは中野と一緒にの中学だった。そして昼休みになりみんなが食堂の方に向った、そして俺は適当なものをチョイスし席に座った俺は別に一人で食べるのはそんなに気にしないのだが周りの奴らがしゃべりながら食べてやる人がほとんどだったそんな中で一人ポツンと食べるのは周りから「あの友達いないの？」「かわいそう。」みたいに思われたくはなかったそこで、俺の中学からの友達井上と俺の席の前の前にいた中野と一緒にの中学校だった久保と一緒に食べた。

「おまえ、朝中野に話していたよな。」

久保が俺に聞いてきた

「ああ、話したけどそれがどうした？」

「もし、あいつに気があるなら悪いことは言わねえやめとけ。中野

とは3年間ずっと一緒だったから分かることなんだがあいつは一般的な常識をはるかに超えてやがるあいつには常識がないかっていうほどな。」

そんなこと、あのあいさつを聞いてたら誰だって分かる。

「中学の時は、事件ばっか起こしていたな有名なのは黒板落書き事件。」

「なんだそりゃ？」

俺は久保に聞いた。

「夜の学校に忍び込んで学校全体にある黒板全部に変な文字で落書きを書いてた事件、教師全員で犯人捜してな一時期犯人を知っているはやつは教師に言ったら賞品を差し上げるみたいなことやってたなでも最終的には犯人は自首してきて終わったみたいない感じだったな。」

「その犯人があいつだったのか。」

「なんせ自分が犯人って教師に言ってからな間違いない。あといろんなことやってたな本当、意味分かんねえよ。でもあいつ結構もてるんだよな、なんせ顔がいいしなあ性格じゃなければいいやつなのに、ま、とにかく言っとくもしあいつに気があるなら悪いことは言わねえ、やめとけ。」

やめとくも何も俺にはそんな気ひとかけらもないのだが、ま俺は今日中野がとんでもないやつだという事を久保から学んだのであった。

俺ののびのび人生を返せ？（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。なんか涼宮ハルヒの憂鬱に似てきた
の気のせいかな（笑）。次回投稿は、まだ決まっています。

俺ののびのび人生を返せ？

久保から中野沙紀がどれほどの変態なのかを学んだのであった、そしてその翌日中野沙紀は動き出したのであった中野がまず最初にやったことはこの学校にある部活をすべて周り仮入部をしてらしい、日にちが変わったらまた違う部活に行くみたいな感じで回って結局はどこの部にも入部しなかったらしい、一体何をやりたいのかまったく分からなかった、それで次にやったのは体育の着替えの時だった。着替えは男子が1年B組の隣にある空き教室で着替え女子は各自の教室で着替えるという事になっている、どうしてこの学校には更衣室というものがないのかという疑問を俺が抱いた、そして次の授業が体育の時、男子はまだ教室にいてというのに中野はそんななお構いなしに服を脱ぎだしたのであったまだ男子がいるのに中野はまるで俺たちの事をゴキブリ以下に思っているであろう、そして俺たちは女子に追い出されたのであった追い出した後女子たちは中野に熱い説教をしたがそのあとも中野はまた男子の前で着替え出したもう女子たちの手では負えなくなっていたそして女子の代表委員が俺たちに授業が終わったらすぐ体操服を持って教室からでるように義務付けられた、はあくやれやれどうしてあんなやつのために俺たちははやぶさのように教室をすばやくでなきゃいけないのかと思った。だが中野の変人ぶりはこれだけではなかった、それは中野の髪型が毎日変わることであった月曜はストレートのロングヘア、火曜はポニーテール、水曜はツインテール、木曜は三つ編みにし、金曜は髪を団子状にまとめた髪型だった。それが一週間ずっと続いたのであった。そして祝日の翌日、俺はいつもどりの時間に学校の登校し教室に向った。そして教室のドアを開け教室に入ると俺の席の後ろの席にはもう中野が座っていた、今日は火曜だからポニーテールかなと思って中野を見ると俺の予想は当たった、中野はポニーテールだった。

「やっぱりな。」

と俺は小声で言い、俺は自分の席に座った間がさしたのであろうそれ以外に思いつかない。

「曜日で、髪型を変えるのはなんでだ？」

中野に話しかけていた。

「いつ気付いたの？」

「ちょっと前に。」

「あっそ、私ね髪型を変えていたらいずれは誰か面白いやつが来るだろうなと思ったの。」

「まゝお前がどうして髪型を変える理由は分かった、それじゃ聞くけど曜日と髪型にはなんか意味があるのか？」

「その日の占いの結果で決めるのよ。」

「そんな占いで、お前は髪型を決めてるのか。」

「いいじゃない、そんなの私の勝手でしょ！なんであんたに文句言われなきゃなんないのよ。」

「いや、そんなつもりで言ったんじゃないんだ。」

「じゃあどういうつもりで言ってるのよ？」

「いや、そんな占いで髪型を決めるなんてそんな珍しい子がいるんだな〜と思って。」

「あっそ。」

そう中野が言うとき中野は俺の方をじーっと見ていた。

「なんだ、なんか俺の顔になんかついてるのか？」

「・・・私、あんたとどこかであったことがあるずっと前に。」

「いや、会ったことは一度もないぞ。」

その時、担任が入ってきてホームルームを始め俺たちの会話そこで止まった。俺は初めて中野と会話できたような気がする、普段だったら「あんたつまんない」「つまらない！」と言われるものだと思っていた。

俺ののびのび人生を返せ？（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来年になると思います。

俺ののびのび人生を返せ？

その翌日から朝のホームルーム前の少しの時間だけ中野と話すようになっていた。

「なあ、中野って確か全部のクラブに仮入部したんだよな、どこか面白いところがあったら紹介してくれよ。」

「そんな面白いクラブがあったらもう入部してるわ。高校に入れば少しはましになるとは思ったけど全然変わらないわね。」

「中野にとって面白いとはなんだ？」

「そうね、まあ怪奇的事ことや宇宙人みたいな感じなやつとか、まあいろいろあるわ。」

俺はあ然とした、俺はお笑いみたな感じなやつかな〜と思っていたのが中野はそれを180度ひっくり返したのであった。

「ねえあんた、この世に宇宙人みたいな奴とか怪奇的な現象があると思う？」

中野は俺に質問してきた。

「まあそうだな、多分あるんじゃないか。だって、よくテレビとかで心靈写真や怪奇的な現象の特集を放送したりしてるしなあ。それによく家で寝ているときに風の音とは違う変な音が鳴ったりして結局はなんの音が分からなかったこともよくあるしな、とにかくこの世にそんなことを否定する理由もないしな。」

俺は、とっさに中野に対して肯定側に立ったのであった。もしここで否定していたら「あんたつまらない男ね!」とか「つまらない!」と大声で言われるのが落ちだからな。そして、俺が中野の質問に答えてすぐグットタイミングに担任が来た。これで、今日は中野との会話を終わりだな。そう思いながら俺は黒板の方向を向いた。そして、一時限目が終わって休み時間の時に久保が俺のところに来たのであった。

「おい、お前どういことだ。」

「なんのことだ、俺がお前になんかしたか？」

「お前、どんな手を使ったんだ？」

「お前一体、何の話をしているんだ？」

「お前良くあの中野とよくあんなに長く会話が出来るよな、始めてみたぜあんなに長く話してる中野の姿、ほんとお前どんな手を使ったんだ？」

「いや、普通に話してたんだが。」

俺はただ普通のつもり中野に話しかけたんだが、久保にとってはそれはかなりと言っているいいほどすごいことであるらしい。

「驚天動地だ。」

「昔から、変な女が好きだったからね。」

そこに井上が来たのであった。

「誤解を招くことを言うんじゃないよ、井上。」

「だって確か中学1年の時、森光さんの事が。」

「井上、それ以上に言ったらしばくぞ！」

俺はまじに井上に怒った。

「ごめん、ごめん。」

「なあ、その森光さんって誰だ？」

久保が井上に聞いてきた。

「中野さんみたいな変な子だったなあ、でも中野さんっていうほどじゃあなかったよ。確か塾が森光さんと一緒だったけ？」

「あゝ一緒だったさ。」

「へえゝその森光さんって頭いいの？」

「うん、つねに学年トップだったなあ。」

「それで、かわいい子だった？」

「そりゃもう、学年内で一番かわいかったよねえ。」

井上が俺にその話をふってきた。

「知らん、覚えてねえな。」

ちょうどチャイムが鳴り、その話はそこで終わった。いやな事を思い出させてくれたなゝまったく井上の奴余計な事を言いやがって、

俺はちよつとテンションを下げてまます授業を受けたのであった。

俺ののびのび人生を返せ？（後書き）

新年明けましておめでとうございます、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

俺ののびのび人生を返せ？

朝、俺は押岡という地区にある自宅から自転車で須崎商業高校に通っている。夏はいいのだが冬になると海沿いの道を走っているとき、向かい風が吹いてこれが顔にあたって一段と寒くなるのである。ま、こんなどうでもいい話は置いて今回はこんな話である。

「よ！」

俺は須崎商業高校に連なっている坂を歩いていた時、誰かに肩を叩かれた。後ろを向いた。

「なんだ、久保か。」

そこには朝からテンションが高い久保がいた。

「なんだその顔は？」

「別に、なんもない。」

「そうか、なあ〜今日って体育あったっけ？」

久保がそんなどうでもいいことを聞いてきた。

「ねえ〜よ、お前、山中の話聞いていなかっただろう。体育は、火曜と水曜と木曜にあるって昨日言ってたじゃねえ〜かよ。」

「そうだっけ、まったく聞いていなかったな。」

「やれやれ。」

ま〜そんなどうでもいい話をしながら俺は久保ときつい坂を上っていた。そして、玄関について俺がげた箱に靴を入れて上履きに履き替え教室に行こうとしたらまた肩を叩かれたから、後向くと

「ちよつと、来て！！」

そこには、ポニーテールの髪型をした中野がいた。そして中野は俺の学ランの襟をつかんで俺を引っ張ったのであった。

「なにするんだ！一体、どこに連れて行こうとしてんだ？」

俺は中野に聞いても中野は答えてはくれなかった、そして、誰も来ない廊下に連れてこられたのであった。

「お前、一体何のつもりだ？」

「どうして、こんなことに気付かなかったんだろう。」

「一体に、何にだ。」

「なかったら、作ればいいのよ。」

「だから一体、何を作るんだ？」

「部活よ！」

「はあ！」

俺は、何の事を言ってるのか全く分からなかった。

「おもしろい部活がなかったら自分で作ればいいのよ。」

俺は、また変なこと言ってやがると思った。

「まあ、お前が言いたいことはだいたい分かった、それで、どうしてそんなことを俺に言うんだ？」

「私が、新しい部活を作るのに協力しなさい！」

「どうして、俺がお前の新しい部活を作るのを手伝わいかんのか説明してくれ。」

「私は、部員と部室を確保するからあんたは学校に提出する書類をそろえなさい。」

「どんな、部活を作るんだ？まず、それを教えてくれ。」

「まだ決めてないわ！とりあえず作るのいいわね！それじゃ、放課後までに調べておいてね！！」

「おい、待て！俺はまだ協力するって言ってねえぞ！」

だがその言葉を言った時には、もう中野の姿はなかった。なんて素早い子だと思っていたのだが、ちょうどその時にチャイムが鳴り俺は大急ぎで教室に向ったのが結局は、間に合わず遅刻扱いになったのであった。畜生、中野のやつもうちょっとでチャイムが鳴ることを知っててあんなに早くあの場合から抜けやがったな。それを知ってたら俺にも教えてくれよなと俺は思ったのであった。

俺ののびのび人生を返せ？（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

俺ののびのび人生を返せ？

ま、朝は散々な目にあっったが今日はあの中野からようやく解放される日だった。今日は席替えをすることになっていた、席順はクラスの多数決でくじ引きで決めるらしい俺にとっては中野から離れれば席の決め方なんてどうでもよかったそして、俺の番になり教卓にあるくじ引きの箱から一枚紙をとり席に座った、座ってすぐ紙に書かれている数字と黒板に書かれている席に数字を照らし合わせた。そして俺は、窓側の一番前の席になった。そして、中野が教卓のここに行きくじを引いて席に座った。そしてクラス全員がくじを引き終えて机の移動が始まった、そして俺は机をくじ引きで決まったところポジションに机を置いたそして、俺は席に座って外を眺めていた。そして担任が

「よくし、みんな席替えは終わったな。一学期はこの席で行くからなそれじゃ残りの時間は自習にします。みんなチャイムが鳴るまで教室から出ないように、チャイムが鳴ったら休み時間にしてください」

担任がそう言い残し教室から出て行った、担任が出て行った後ほかの人たちがほかの生徒に話していたから俺はまだその時、後ろの人がだれか分かっていなかったから俺は後ろを向くとそこには、おさらばしたはずの中野が堂々と座っていた。

「中野、お前ここの席のくじ引いたのか？」

「そうよ、なんか文句ある」

「いや、そんなつもりで言ったんじゃない」

「あつそ、それであんたちゃんとあれ調べたの？」

「あれってなんだ？」

「学校に提出する書類の内容よ、あんた朝の話聞いていなかったの？」

「あゝあのことか、てか俺はそれに協力するって言ってないぞ」

「そんなネチャネチャ言ってる暇があったらやりなさいよ、どうせすることも無いんだからいい暇つぶしになるでしょ。とにかく今日の放課後まで調べておいてね」

ちようど、その時チャイムが鳴り一時限目の授業が終わり中野はチャイムが鳴ると同時に席を立ち教室から出て行った、ま、確かに中野が言ったことには一理あるがだが俺はいつも暇じゃないんだと俺は心の叫んでいた、そして、時間はたち放課後、俺は中野にまたどこかに連れてこられていたのであった。

「おい、今度は一体どこに連れてきたんだ？」

「あんた、ちゃんと調べておいてくれたよね？」

早速、俺の質問は無視しやがった。

「あゝ、ちゃんと調べたさ」

「そう、んじゃあんた書類を書いて学校に提出しておいて」

また、俺に命令しやがった。

「おい、俺はまだどんな部活を作るのか全く知らんのにどうやって書けっていうんだ、そういうことは創設者が書くもんじゃないのか？」

「私は、ちゃんと部室を確保したのよ部室を確保するのにどんだけ苦労したと思ってるのよ！！それに比べてあんたはただ調べただけってこんなの不公平じゃない！」

「おい俺はただ、調べるようにて言われたただだぞ」

「それじゃあ、新しく命じるわ。書類を書いて学校に提出しておきなさい」

「なんだ、その言い方はなんでもっとましの言い方があるだろう」

「いいからやりなさい、これで両方の仕事の量は同じなるから」

これ以上、中野と口論すると夜になってしまいそうだったから俺は中野の理不尽な要求に答え俺はしぶしぶ書類を書いて生徒会に提出したのであった。

「おい、提出してきたぞ」

「そう、それじゃもう帰っていいわよ」

中野は俺にそういう後ろを向いて階段を降りって行った。

「おい、ちょっと待て」

「なによ」

「さっき書いた、書類の中で部室のらんのとこ本当にあそこで良かったのか？」

「いいのよ、ちゃんと許可とってるし。あ！言い忘れた、あんた明日その部室に放課後に集合ね」

「おい、もう俺は用済みじゃなかったのか？」

「部員が足りないのよ、とりあえず仮部員としてさっきに書類に書いたから」

「おい！なに勝手に書いてるんだ！！」

「いいじゃん、あんたどうせ放課後はまっすぐ家に帰るだけでしょ」「そうだが、でも」

「とにかく明日、放課後に部室に集合ね」

俺がまだしゃべってるのに明日のことを言い中野は、階段を降りっていった。

俺ののびのび人生を返せ？ (後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

俺ののびのび人生を返せ？

翌日の放課後、俺はいい暇つぶしになるだろうと思って中野に呼ばれた部室に向った。そして、その例の部室のドアの前に来た、ドアの中心のところに「写真部」堂々と描いていた、俺は本当に大丈夫なんだろうなあと思いながらドアを開けた。

「お邪魔します」

小さな声で言った。

「あ！何やってたの、遅いじゃない。もう何分たったと思ってんのよ！！」

俺の数倍以上の声で言ってきた。こいつは加減という言葉を知らんのか。

「悪かったな、来るのが遅くて。なあ本当にここでいいんだよな」

「そうよ、ここでいいのよ」

「んでも、さっきドアのところに「写真部」って書いてたぞここは写真部の部室じゃないのか」

俺は、この部室に入って最初の疑問を中野にぶつけた。

「大丈夫、ここの写真部は今廃部状態に等しいの、部員がいなくてね。今年の5月までに新しい部員が入らないと廃部になる唯一の部なの」

「待て、それはまだこの写真部は廃部になってないんじゃないのか」

俺が中野にそう言った後、中野は堂々と自信たっぷりに

「いいのよ、もう誰も写真部に入らないし」

「なぜ言い切れるんだ、理由を教えてください」

「昨日、1学年全員に聞いてきたのよそしたらみんな写真部には入らないって言ったのよ」

よくまあ、そんなことができるなあと思った時、中野が何かを思い出したような顔をし

「あ！忘れた、ちょっとここで待ってすぐに戻るから」

そう言い残し、中野は部屋から出て行った。部屋に残された俺は、近くにあったパイプ椅子に座り中野が帰ってくるまで待つことにした。そして、数十分後

「ただいま!!」

中野がドアを開け、また大きな声で言いやがった。

「やっと来たか、ってその人は？」

中野の隣に背が小さく髪が腰のあたりまである長い髪をした女子がいた。

「この子は、一年C組の泉あやさん。部活なに入ってるのって聞いたらまだ入ってないって言ったから連れてきたの」

また強引なやり方で連れてきやがって、もっと別の方法があるだろうが

「あの、沙紀さんここってどこですか？」

泉さんがよろよろした声で中野に聞いた。

「私たちの部室よ」

「え?でもドアのところに写真部って書いてたけど」

「ここは、中野が強引に写真部の部室を占領しているだけですから俺はさりげなくフォローした。

「強引とは失礼ね、ちゃんと生徒会に申請したじゃないのよ」

中野が突っ込んできやがった。こいつには常識っていう言葉があるのか。

「ま、そういうことであやちゃんにかくこの部に入部してもらわわ」

「おい、待てまだ泉さんは入るとはまだ言っていないぞ」

「大丈夫よ、もう本人の許可はとってあるから」

「え!そうなの、本当ですか泉さん?」

「はい、さつき教室で」

何と早い勧誘だ、あの数分で勧誘しやがってあいつに勧誘業をやらせたら間違いない儲かるぞ。

「ま!そういうとこで、これであと二人揃えば完全に部として認めて

もらえるわね」

「おい待て、部員が仮部員と部員で二人なったからそろそろどんな部活にするか話してくれないか？」

俺はまだ、この部がどんな事をするのかをまだ知らないのだ。

「あと二人そろったら、言うわ。それまで楽しみに待ってなさい。んじゃ今日はこれで解散、また明日ね！」

そう言った後、中野は元気よく廊下に飛び出て行った。

俺ののびのび人生を返せ？（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

俺ののびのび人生を返せ？

朝、俺はいつもの時間通りに高校へのびる坂道を上っていた時後ろから声をかけられた。

「よ！おはよう」

後ろを見ると、そこには朝っぱらからテンションが高い久保がそこにいた。

「なんだ、お前か朝からテンション高いなあお前は」

「テンション一人だけたくて悪かったなあ」

「いや、別にいいんだが」

「そういやあお前、昨日の放課後どこ行ってたんだ？」

「中野に連れまわされいたのさ」

「お前も大変な奴に捕まったな」

「うるさい、黙っとけ」

こんな感じで俺は久保と一緒に学校に向ったのであった。そして、学校につき俺が教室に入った時俺の後ろの席にいつが座っていた。中野は右手でほをついて外を眺めていた俺は、中野の隣を通り自分の席に行きかばんを横にかけ席に座った瞬間、中野に方を方を叩かれた。

「ねえ、あんた今日も部室に来ないと許さないからね」

「あのなあ中野、お前あと三人必要なんだろう当てはあるのか？」

俺は、部員の事について中野に聞いた。

「大丈夫よ、ちゃんと当てはあるわ。あと二人集めればいいんだから」

「おい、三人の間違いじゃないのか？」

「何言ってるのよ、あと二人でしょう。私とあやちゃんとあんたであと二人でしょ」

「おいおい、俺がいつからお前の部に入ったんだ」

「一応、仮部員として書類のところに書いてたから」

「あの書類か」

俺は生徒会に提出する書類の部員の欄のどこにあいつに急かされて俺の名前を書いたことを今、思い出したのであったまったく忘れたいたこんな肝心なことをくそ一体、俺の頭どうなってるんだ。

「ま、そう言うところで今日の放課後部室に集合ね！私より遅きていたら罰金もらうからね、いい分かった!？」

その瞬間、チャイムが鳴り担任が入ってきた。

そして、放課後俺はしろうがなく写真部の部室に向ったのであった。そして写真部の部室のドアの前に着きそして、ドアを開けるとそこにはポツンとあやさんが座っていた。

「あれ、中野さんは？」

「ホームルームが終わった後猛スピードで教室を出て行ってどこかに行きました」

「そうですか、一体どこに行ってたんでしょうね」

「さあ、そう言えばなんであやさんここにいるんですか？」

「昼休みに中野さんが来て放課後に部室集合ねって言ってたんでそれでしたんです」

「そうですか」

「あ！あの、私を呼ぶ時はあやさんじゃなくてあやでいいですよ、同級生だしさん付けしなくていいですよ」

「そうですか、分かりましたこれからあやって呼びますね」

「これからよろしくお願いします」

「こちらこそ」

とあやと話をしていた時あいつがドアが壊れそうな感じでドアを開けた。

「たっただいま!!」

「どこ行ってたんだ、俺たち二人をここに置いて行きやがって」

「ごめん、新入部員迎えに行ってたら遅くなってる」

そう中野が言うとか中野はまた廊下に出て今度はツインテールをした女子を連れて一緒に入ってきた。

「おい、その人は？」

俺は中野に聞いた。

「はじめまして、一年B組の坂本美咲って言います。趣味はアニメや漫画を見ることです？よろしく」

「こちらこそ、よろしく」

俺は椅子から立ち少し頭を下げた。

「今日から、私たちの部に入ってもらおう事になったから」

「いいんですか、こいつの意味不明な部に参加して？」

俺は、坂本さんに質問した。ま、これは一番最初に聞いておかなければならい重要な質問だ。

「うん、別にいいよ。どうせ家に帰ってもネットゲするだけだしいい暇つぶしになるし」

「そうですか」

またオタク的な人を連れてきたなあ、あいつは何を基準に連れてきてるんだ。

「ま、そういうことで今日は顔見わせが目的だったし、今日これで解散！みんな帰っていいわよ」

今日は、顔見わせが目的だったらしいこいつは、そんなことで俺達を呼んだのか。中野が来て数分で今日は解散となった。

俺ののびのび人生を返せ？（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は分かりません。

俺ののびのび人生を返せ？

ゴールデンウィークという長い連休が終わり、またいつもの坂道を上っていたのであった。まあ何週間もこの坂道を上っていたらだんだんと慣れてくるだろうと思っていたが、今も昔も変わらずにこの坂道はきつかった。もっと平地に作ってくれたら良かったのに、そう思いながら俺は坂を登りきってようやく学校の玄関に着いたのであった。玄関について俺は下駄箱に自分の靴を入れて上履きに履き替え教室に向った。俺が所属している教室は四階のはじっこにある、またそこまで歩くのがめんどくさいと階段をのびりながらそう思った。そして、四階のはじっこにある教室に行き教室に入った。そして、自分の席に向った。そして、俺の後ろの席にはいつも朝は外を眺めている中野が座っていた。そしてかばんを机の横にかけ椅子に座った瞬間、中野が俺の方を向いて

「あ、やっときた」

中野が俺に声をかけてきた。

「あんた、いつも思ってるんだけどあんた学校に登校するのいつもぎりぎりの時間に来るわね」

「ぎりぎりまで、寝たいからだ」

俺は堂々と中野に言った。

「あっそ、今日もちゃんと放課後に部室に来るのよ」

「へいへい、分かりましたよ」

その時、グッドタイミングにチャイムが鳴った。

そして、放課後俺はもういつもの習慣になっているのか勝手に足が部室の方に歩いて行った。たった数週間でこんな習慣がつくなんてまったく予想付いてなかったぜ。そして、部室のドアの前に来て一息ついてドアを開けた。

「こんにちは」

そう言って、ドアを開けてみるとそこには読書をしていた泉がいた。

「あ、こんにちは」

「まだ、あやだけか？」

「そうです、中野さんは？」

俺は椅子に座りながら

「まだどっかに行きましたよ」

といった。

「そうですか」

「それ何の本読んでるの？」

俺は泉が読んでいる本が気になって聞いた。

「ああ、これ。涼宮ハルヒの憂鬱っていう本です」

「へえ、それ面白い？」

「ものすごく面白いです」

泉は微笑みながら言った時、部室のドアを誰かが明けた。

「こんにちは、あれ二人だけ？」

入ってきたのは、坂本だった。

「ん？あやそれ何の本？」

坂本は泉の横に座って聞いた。

「これ、涼宮ハルヒの憂鬱っていう本です」

「あやってラノベ読んでんだ！！」

「前から読んでます」

「へえーそうなんだ、あ！その本、読み終わったら私に貸してくれる？」

坂本が泉に聞いた。

「いいですよ」

「ありがとう、その本前から読んでみたくてね私、ハルヒのファンだから」

「そうなんですか、じゃあ明日には貸しますね」

「え！そんなに早く読めるの！」

「あと少しで読み終わるんで」

と二人は、本に関する話をしていた。俺はというともうすぐ中間テ

ストがあるのを思い出し机に教科書やらノートを広げて猛勉強していた、それから何時間経っただろう二人はライトノベルの話をしたリアニメの話をして盛り上がってるのに対し俺はまるで高校受験の前の日の夜に一夜漬けをしている中学生のように勉強していた、それほど自信がないという事だ特に数学が。

「ねえ、沙紀はいつ来るのかな？」

坂本が勉強中の俺に聞いてきた。

「分からねえなあ、もうこんな時間だしそろそろ帰りましようかね。鍵は俺が閉めるので」

「そう、それじゃお先に。あやこれからちょっとツタヤに一緒に行かない？ちょっと買いたい本があって」

「いいですよ」

「それじゃあ、行こうか」

と言いながら、坂本は泉を連れて部屋を出て行ったのであった。そして窓の鍵を閉めてドアの鍵を閉めて俺は学校を後にしたのであった。

俺ののびのび人生を返せ？（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

俺ののびのび人生を返せ？

翌日の朝、俺が学校に行き教室に入り自分の席に座ると俺の後ろの席にいる奴が突然俺の頭を叩いた。

「何すんだ！」

俺は後ろ向いて行っただけ。

「あんた、誰の許可をもらって帰ったのよ！！」

「お前が来なかったからだ、昨日はどこに行ってたんだ？」

「昨日は、新入部員になりそうな人を説得していたの。その人がなかなかうんって言うてくれなくて説得するのに苦労したわよ。今日その人を連れ行くから絶対今日は帰っちゃだめいいわね！！」
と朝こんなやりとりがあり、俺は今部室にいたのであった。

「あの、中野さんまだ来ないの？」

泉が本を読みながら俺に聞いてきた。

「たぶん、新入部員となる人を強引に引っ張って来てると思う」

「そうですか」

「こんにちは」

部室に入ってきたのは坂本だった。

「あれ、沙紀は？」

「今、新しい部員となる人を連れて来てると思う」

「あーそう、あ！あや、けいおん見た！」

「はい、見ました」

「あの唯の天然ぶりは笑っちゃうよね」

と二人は昨日の夜に放送された深夜アニメの事について話し出した。俺はというと机に教科書やらノートを広げてテストに向けて勉強していたのであった。それから数分後、部室のドアが思いっきり大きな音を立ててドアが開いた。

「ヤッホー！みんないる？」

中野が笑顔でものすごいテンションが高いまま部室に入ってきた。

「どっからそんなあいさつ持ってきたんだ？」

「今日新しく入ってもらったところになった」

そう言うともた部屋を出て男を連れて入ってきた。

「高野拓実君よ、みんなこれから仲良くするのよ」

と簡単な紹介を中野がした。

「はじめまして、一年A組の高野拓実です。どうぞよろしく」と本人があいさつした。

「こちらこそよろしく」

と俺たち三人も挨拶をした。そして中野は部屋の奥に行き窓の近くまでも行き振り向き俺たちに言った。

「これで五人そろったわね、それじゃあ今からこの新クラブが一体何をするのクラブなのかを発表するわね」

そう言うともた中野は、黒板がある方に移動しチョークを持って黒板に文字を書きながら言った。

「この新クラブは、面白いことを探し出したりまあその他にもいろんなことをする部よ」

「おおざっぱな部だな」

と俺はぼつそといった。

「んじゃ、今日はこれで解散ね！明日もちゃんと来るように！！それじゃ」

といって、中野は荷物を持って部屋を後にした。

俺ののびのび人生を返せ？（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

俺ののびのび人生を返せ？

季節は夏になりかけの梅雨、中間テストが終わりペケが多く付いた答案用紙を返却されしょんぼりしているとき、中野がシャーペンの先で俺の肩をツンツンとついた。

「なんか用か？」

「テストの結果どうだった？」

「何も聞くな、そう言うお前はどうかだったんだ？」

「え！私は、ほれこの通りよ」

そう言って中野は机の中に入れていた、テストの答案用紙を机から出して机の上に並べた。

「！？お前、これは何の冗談だ？」

「冗談じゃないわよ、これが私の実力よ！！」

そう、中野が笑顔で言うおうがどうでも良かったかが、俺はそんなんより中野が机の上に広げた答案用紙に書かれた点数が気になった。

「お前、よくこんな点数取れるよな」

中野の答案用紙に書かれた点数は、すべて90より上だった。こいつは、ばけもんかと思った。

「これくらいの問題簡単じゃない、ほとんど中学で習ったことじゃない」

確かに、問題の配分は中学で習った単元が多く出たが別にそこまで簡単じゃなかったぞ。それに、プラスして高校で習った単元も出ているのにそれを簡単という言葉で済ませるなんてこいつの頭どうなっているんだ。

「簡単って、お前中学の時に塾とかに通っていたのか？」

「そんなものに通う訳ないじゃん、あんなのただ時間を無駄に使うだけしょうが。それにどうして、学校で習ったことをどうしてそんな塾とかで、やんなきゃいけないかよく分からないわ。それだったら、学校なんかいらないじゃん」

「まあ、そうなんだが。ほら、学校で習っていても分からないことがあるから塾に行ってそこを克服するために、塾っていうのがあるのじゃないのか？」

「ふーん。それじゃ、聞くけどあんた、中学の時に塾通っていたの？」

「まあ、中学二年から今年の2月まで通っていたけど」

「それで、効果はあったの？」

「ああ、大有りだったさ。テストだって入る前と入った後とは大違いだったよ」

「そう、それで？」

「それでって？」

「だから、あんたのテストの結果よ。まだ私のしか教えてないじゃん！さっさと、教えなさいよ！」

「まあ、平均点くらいかな」

と苦笑いしながら言った、それもそのはずだ、俺がさっき言ったことはまったくの嘘を言ったからである。本当の結果は、赤点ぎりぎりまで点数が低いのだ。あんなに必死に勉強したのに、その結果は散々な結果として答案用紙に赤いペンで書かれていたのであった。

「そう、だったらいいわ。もし赤点なんかとっていたら殴り飛ばしていたわ」

本当の事を言わなくて本当に良かった、もし言っていたら殴り飛ばされていた。本当に危なかったと俺は思った。

俺ののびのび人生を返せ？（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

俺ののびのび人生を返せ？

教室で、中野と中間テストの結果発表した日の放課後、俺はもういつもの習慣になったんだろうか部室へと足を走らせていたのだった。そして、部室へ向かっている途中に職員室から出る高野がいた。

「よ、お前何やってるんだ？」

俺は、高野に聞いた。

「あ、どうも」

と高野は頭を少し下げた。

「今日は、僕が日直の日でしてね。今、先生に日誌を渡しに行っていたんです」

「そうか、それはご苦労なこった」

「いえ、これも仕事ですからね。あ！中野さんに、まだ日直の仕事があるので少し遅れますって言うておいてください」

と高野は、にこにこ笑いながら言った。

「ああ、そう伝えておくわ」

と俺は高野にいい、俺は部室に向ったのであった。そして、別校舎へ行く渡り廊下を小走りで通過し古びた階段を一段飛ばしで上がり、そして、部室がある階に着きいかにも古そうな廊下を歩き部室のドアの前に着いたのであった。ドアの向こうから、坂本と泉が話している声が聞こえた。そんな声を聞きながら俺は、なぜか理由もないのに二回深呼吸してからドアノブに手をかけ、ドアを開けたのであった。

「こんにちは」

と俺があいさつしながら、部屋の中に入るといきなり中野が

「遅い！何やってたの！？」

と突然、大声で俺に言ってきた。

「悪かったな、高野と話していたんだ」

俺は、肩にかけていたかばんを机の上に置きながら言った。

「それでも、遅すぎるわよ！あとで、遅刻の罰として罰金をもらうからね！！」

中野は、俺に指をさして言った。そして、窓がある方に行き

「つで、高野君はどうしたの？」

と俺に聞いてきた。

「まだ、日直の仕事があるから、少し遅れるってさ」

「そう、じゃあしょうがないわね」

中野は、窓から見える景色を見ながら言った。俺は、俺が座っている椅子の前で本を読んでいた泉にテストの事を聞いた。

「あや」

「何でしょうか？」

「今回のテストの結果どうだった？」

「まあ、そうですね。数学がちよっと悪かったくらいですかね」

泉は、苦笑いをしながら言った。まあ、泉さんの事だ、悪かったと言っても俺と比べたらその差は圧倒的なものだろうと俺は予想した。

「坂本はどうだったんだ？」

俺は、泉の横にいた坂本に聞いた。

「私もちよっと予想していた点数よりも悪かったな」

と言いながら、坂本は自分のかばんからは中間テストの答案用紙を机の上に出した。

「坂本、これマジか」

俺は自分の目を疑った、坂本が机の上に広げた答案用紙の点数すべてに十の位のところに9と書かれていた。

「まあ、一夜漬けだったしね。しょうがないか」

「一夜漬けでこんなに取ったのか？」

と俺は、腰を抜かして椅子に座っていった。

「私、普段から一夜漬けで今までのテスト乗りきってきたから」

「へえ、すごいじゃない、美咲！」

と中野が俺の横からしゃしゃり出て言った。

「ありがとう、沙紀」

と坂本は、微笑みながら言った。

「それ比べて、あんたは赤点ぎりぎりってどういうことよ」

「な！どうして、お前俺の点数を知ってるんだ！」

確かあの時、俺は中野に嘘をついて平均点くらいだと言ったはずなのに、なぜこいつは本当の点数を知っているんだ。

「あんたが、教室から出て言った後、窓から風が吹いたかは分からないけど、あんたの机の中からなんか飛んで出てきたのよ。それで何が落ちたかなあとと思って拾ったら、赤点ぎりぎりの答案用紙だったのよ」

不覚、一生の不覚だ。親にばれないと思って学校に置いて行っただけが間違いだった。あのまま、家に持って帰って隠しておけばよかった。

「本当に、あんたには呆れたわ。あんたがそこまでのバカだとは思わなかったわ」

「うるさい！今回は、山が外れただけだ」

「あんた、そんなんだからそんな点数取るのよ」

と中野は、呆れた顔をして言った。

「どうも、遅れてすいません」

と高野が入ってきた。

「あ！高野君、テストどうだった？」

と中野が、高野に聞いた。

「テストですか？まあ、そうですね。ほとんど90代でしたけど」と高野は、言った。

「ほら、高野君だってこんなに高得点取ってるのになんで赤点ギリギリの点数を取るのよ！」

「悪かったな、そんな点数を取って」

「はあ」

中野は、溜息をついた。

「あや、今日あやが住んでいる家にいける？」

「はい、別にいいですけど、でも、どうして聞くんですか？」

「みんなこれから、あやの家に行くからみんな自分の荷物を持って」

「おい、どうして今からあやの家に行くんだ？」

俺は中野に聞いた。

「今から、あやの家について勉強会するのよ！あんたがそんな点数を取るから」

「じゃあ、別にお前の家とか俺の家でもいいんじゃないのか？」

「いいじゃない、あやが良いって言ってるし、部員の家はみんなが知ってないといけないでしょ」

いや、別に知ってなくても別にいいと思うのは俺だけだろうか。

「まあ、そういうことで今からあやの家に行くからみんな自分の荷物を持って玄関に集合ね」

と中野は言い、今から泉の家に行くことになったのであった。

俺ののびのび人生を返せ？（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

俺ののびのび人生を返せXIII（前書き）

「俺ののびのび人生を返せ！」の作者坂田銀時ですこのたび、3月11日の宮城県三陸沖を震源とした「東北地方太平洋沖地震」におきまして、津波・原発からの放射線漏れなどで多くの・ひばく者・行方不明者・負傷者・死者が多く出ています、被害にあわれた皆様に心よりお見舞い申し上げるとともに、犠牲になられた方々とご遺族の皆様に対し、深くお悔やみを申し上げます。一日でも、早い復興を心からお祈りいたします

俺ののびのび人生を返せXIII

玄関で集合した後、毎朝重い足で登っている坂道を下り途中、俺が自転車を停めている駐輪所に立ち寄り自分の自転車を引き取り自分の荷物を自転車のかごに入れて、自転車について歩いたのであった。そして、歩いている途中に交差点の信号が赤になり足をとめた時俺は横にいる高野に声をかけた。

「なあ、高野よ」

「はい」

「お前は、自転車で学校に来ていないのか？」

「別に、自転車で来るといってほど遠くに住んでいないので、いつも歩いて来ています」

と高野は、にこやかに笑いながら言った。

「そうかい」

俺がそう言った瞬間、歩行者専用の信号が赤から青に変わったのでまた歩き出したのであった。それからしばらく歩き、少し住宅地が多くあるところに来て、そこから少し歩いたくらいで泉が

「着きましたよ」

と言った。学校から出てたった、数分という短い時間で泉の家に着いたのであった。

「へえ、ここがあやちゃんの家なんだ。結構、でかいわね」

と中野は、泉の家の大きさに驚いていた。泉の家は、まるで大金持ちが住んでいそうな大豪邸だった。庭も野球ができそうな広さだった。

「どうぞ、入ってください」

泉がそう言うと、泉は玄関のドアを開けたのであった。

「おじゃまします！」

と中野が言って入った後、高野と坂本も中に入って行った。俺は、自転車を車庫と思われる場所に自転車を停めてから中に入ったので

あった。

家の中に入ると、泉は二階に俺たちを通してくれた。そして、泉は階段のすぐ横にある部屋のドアを開けた。

「どうぞ、入ってください」

と俺たちをその部屋の中に入れた。部屋の中はあんがいシンプルな感じがしたのだが俺は本棚を見て自分の目を疑った。本棚には、ライトノベルと思われる本がぎっしりと詰め込まれていた。しかも、その本棚に入りきらなかった本が本棚の横に山のように積まれていた。

「ものすごい、本の量だな」

「これは、驚きました」

と高野が、いつもにこにこと笑っているのだがさすがにこの本の量には驚いたらしい。

「あやさん、ここには何冊くらいあるのですか？」

高野が、泉に聞いた。

「そうですね、だぶんだけどざっと100冊くらいあるんじゃないかな」

「100冊！そんなにもあるのか！」

俺は、泉が所有している本の量に驚いた。

「へえ、あやちゃんってこんなにも本が好きなんだ」

と中野が、本棚にぎゅうぎゅうに詰め込まれている本を見ながら言った。

「はい、特にライトノベル系の本が好きですね」

「へえ、そうなんだ。あ！」

中野が、部屋の壁にかけられていた時計を見て声を上げた。

「やだ、もうこんな時間じゃない！みんな、勉強道具を出して今から二時間みっちり勉強するから覚悟しなさいよ！」

こうして今から、二時間ぶつとうしで地獄の勉強会が始まったのであった。

俺ののびのび人生を返せXIII（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

俺ののびのび人生を返せXIV

それからというものの、高野や泉は黙々と勉強しているのに坂本は本棚にあるライトノベルの本を取って読んでいた。

「おい、中野よ」

「なに？」

「坂本は、本を読んでいてもいいのか？」

「別にいいわよ、あんたほどバカじゃないから。ほら、あんたその問題間違っているわよ」

と中野は、俺が一生懸命の解いた問題の答えを否定したのであった。

「一体、どのあたりが間違ってるか説明してくれ」

「まったくしょうがないわね、いい、この方程式の解き方が違うでしょうが！この解き方は中学の時に習ったでしょう」

と中野は、俺が書いた回答欄のところに赤いペンで間違ったところを修正しながら説明していった。俺は、それを聞いてただ首を縦に振って分かっているような風に行動した。ま、実際のところは全く理解していなかった。もう、俺の頭で理解するには限界であった。

中野が開催した、この勉強会は俺たちが泉の家に着いてから二時間休まずにやらせたのであった。その間俺は、中野に耳元で鼓膜が破かれそうなかいかい声を聞かせながら中野に教えてもらっていたのであった。

「あんた、こんだけ私が教えたのになんで理解できないの？」

と中野が、呆れた顔をして疲れ切った目をして言った。

「理解できなくて、悪かったな」

「・・・・・・はあ」

中野が溜息をついて、壁にかけられていた時計を見た。時計の針は、もう六のところを指していた。

「もう、こんな時間か。これ以上、あやちゃんの家に行ったら迷惑もかかるし今日はもう解散しましょう」

「そうだな、それじゃ帰りましようかね」

と言いながら、俺が机の上に広げていた勉強道具をかばんに入れようとした時

「それじゃ、高野君と美咲は自分の家に帰っていいから」

俺は自分の耳を疑った。中野が言った帰ってもいい人の中に俺の名前が含まれてはいなかった。

「中野さんや、俺も帰ってもいいんだよな」

「あんたの頭のレベルには本当に呆れたわだから、今から私の家に来てもらって学力向上のためにもっと勉強してもらおうから」

「おい、ついさっきまで通常の二倍くらい勉強したのに今からお前の家に行ってさらに勉強しなきゃいけないのか」

「そうよ、次のテストでいい点数を取らないとあんたの夏休みがなくなるのよ、それでもいいの？」

中野がそう言う俺は反射的に

「いやだ」

と言った。さすがに夏休みを奪われたら俺の人生は終わってしまう。もしも、夏休みがなくなったら休みの間は、エアコンもなく扇風機もない、地獄絵図に出てくる灼熱地獄のように暑い教室で汗を流しなら補習をしなきゃいけないと思うと心からぞっとする。

「いやでしょう。だから、私が次の期末でいい点数を取れるようにみっちり教えてあげるから！」

「そ、そうだな。さすがに次のテストで落としたらまずいよな」

「そうでしょう、だからさっさと片付けなさいよ！」

「分かった」

と言って俺は、机の上にあった勉強道具をかばんの中に次々と入れていった。

俺ののびのび人生を返せXIV（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

俺ののびのび人生を返せXV

机の上に広げていた勉強道具をかばんに片づけて、俺と中野は部屋から出て一階に下りて玄関で靴を履いていた。そして、俺が靴を履いていた時後ろから泉が

「勉強、がんばってくださいね」

と俺の耳元でささやいてくれた。

「あ、ありがとう」

「それじゃ、また明日ね」

とニコニコと微笑みながら泉は言い、また二階へと上がっていたのであった。

「何やっているの、早く行くわよ」

中野が不機嫌そうな顔をして言い、先に外に出ていったのであった。

「おい、ちょっと待てよ!」

俺は、まだ途中まで結んでいた靴ひもを強引に靴の中に押し込んで玄関から出たのであった。

玄関から出て、俺は自転車を停めてあった車庫と思われ場所に向ったのであった。そして、その場所に行くと中野が自分の荷物を俺の自転車のかごに入れて立っていた。

「ほら、さっさとしなさい」

「ああ、分かった」

と言いながら俺は、自転車のかごにかばんを入れてサドルに腰をかけてペダルに足を乗せていざこぎ出そうとした時、中野が

「ちょっと、待って!」

と言い、自転車の荷台のところに乗ったのであった。

「中野よ、俺、あんまり二人乗りのことないからどうなっても俺は知らないぞ、それでもいいのか?」

俺には、二人乗りで自転車を漕いだ経験があまりないのだ。中学の時に、一度だけやっとなことがあるがその時は、バランスを崩して転

倒したという負の思い出がある。

「別にいいわよ。歩いていたら時間がかかるしそれに……」

中野は、顔を下に向けて黙り込んでいた。俺は少しでも顔を後ろに向けてうつむいている中野の姿を見てまた顔を前に戻し

「……ま、お前が良いって言うのなら別にいいか」

と指で鼻の先を触りながら言った。

「そ、そうよ！分かったのなら、さっさと行きなさいよ！」

「はい、はい、分かりましたよ」

と言って、俺は自転車をいつバランスを崩して転倒するか分からないほどの蛇行をしながら漕ぎ進めたのであった。

俺ののびのび人生を返せXV（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

俺ののびのび人生を返せXVI

自転車が蛇行しながら走っているその間、中野は自分の自宅へ誘導する以外は何も喋らずに、長い髪の毛をまとめたポニーテールを自転車の風で揺らめかせながら、手で俺の腰をぎゅっと抱きしめて俺の背中に頭を当てていた。俺はそれも何も言わずに、ただ中野に指示した方向へと自転車を漕いでいたのであった。そして信号で止まった時、俺は中野に聞いた。

「お前、さっきから俺の背中に頭を当てていたけど大丈夫か？ 頭が痛いのか」

「な！ そんな訳ないでしょう、頭が痛かったらあんたなんか家に呼ばないわよ！」

最初の方は、顔を真っ赤に染めて驚いた顔をしたが最終的には、普段の中野に戻ったのであった。

「ほら、信号変わったわよ」

と中野は、信号の方を指さして言った。俺は、なんとなく深呼吸して自転車を漕いで前に進めたのであった。泉の家から出て数十分経過して、俺と中野は海沿いの県道を走っていたのであった。俺の家とは全く逆方向へと向かって自転車を漕ぎ進めていたのであった。そして、海沿いの道を抜けて住宅がある港町の小道へと中に入ってしまったのであった。

「おい、中野よ」

「なに？」

「あとどれくらいで、お前の家にたどり着けるんだ？」

「もうすぐ着くわよ」

と言ってからしばらく複雑な道を曲がったりしていると、中野が突然「着いたわよ！」

とまだ俺が自転車を漕いでいたのに中野はさっと自転車から降りて、その場に立っていた。

「着いたのなら、もっと先に言えよ」

俺は自転車を止めて、中野が立っている場所に行った。

「ここが、お前の家なのか」

家を見てみるとどこにでもありそうな二階建ての一般的な家だった、さっきまでいた泉の家と比べると差は少しあるが、そんなに狭そうな家には見えなかった。

「そうよ、自転車は玄関の横の所に停めてから中に入ってよ」

「分かった」

と言って俺は、自転車を中野が指示した場所に停めてから家の中に入ったのであった。

「お邪魔します」

家の中に入ると、中野は二階へと俺を通してくれた。そして階段を上がり二階に着いて廊下をちよつと歩いて一番奥にある部屋へと来た。

「先に部屋の中に入っていて、ちよつとお菓子とか取ってくるから」
と言って中野は、階段を降りて一階に降りて行った。

「ああ、分かった」

と言って俺は部屋のドアを開けて中に入った。部屋の中は、勉強机の上にデスクトップ型のパソコンが、置いてあった。そして壁際には本棚やタンスやいろいろな家具が置いてあった。

「あんがい、普通の部屋だな」

と独り言を言いながら、俺は部屋の中央に置かれていた卓袱台より少し小さい目の机の上にかばんを置いて、机の横に座って壁に掛けられていた時計を見た。

「もう、七時か。母さんに今日は遅くなるってメールしよう」

俺は携帯電話をかばんから取り出して、母さんに遅くなるというメッセージを打って、母さんの携帯電話に送信した。『送信しました』という表示を確認してから、携帯電話をかばんの中に入れた。

俺ののびのび人生を返せXVI（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

俺ののびのび人生を返せ??

俺が携帯電話をかばんの中に入れると同時に、部屋のドアが開き髪の毛が長くストレートの髪型をした女の子が入ってきた。

「ほら、お菓子持ってきたわよ」

「……」

「なに口をポカンと開けているのよ、なんか私の顔に付いているの？」

「中野……沙紀……だよな？」

と俺は、その女の子から発せられた声で俺は中野だと判断したが、当たっているかは自信がなかった。

「そうよ、誰だと思ったの」

中野は少し怒り、持ってきたお菓子の袋を机の上に置いて、俺とは逆の方に座った。

「いや、いつもお前髪型がポニーテールだから……一瞬、誰か分からなかった」

俺は、中野に申し訳なような感じで言った。

「まったく、あんたもまだまだね！ 髪型が少し変わったくらいで、分からなくなるなんて」

「分からなくて……悪かったな」

「ま、別にいいけど。ほら、あんたも食べなさい！ 食べた後は、みっちり勉強するからね！」

と言って、中野はお菓子の袋を取ってハサミで袋を切って、中に入っていたお菓子を取って手にとって口に運んで食べた。

「これ、食べた後にまた勉強するのか」

と言いながら、俺は袋の中からお菓子を取って食べた。

「それが目的で私の家に来たんでしようが、それくらいこと分かっていなさいよ」

「そうだったな、すっかり忘れていたぜ」

「あんたって、本当にバカね」

と中野は、呆れた顔をして言った。

「バカで、悪かったな」

と言って、俺は再び袋からお菓子を取って食べた。

「そういや、中野よ」

「なに？」

「こんな夜遅くに、俺がお前の家に上がり込んでいても大丈夫なのか？ お前の親は良

いって言っているのか？」

と中野に聞いた。こんな夜遅くに男子が女子の家に上がり込んでいるのに、それに対してなにも言わない親など俺は聞いたことがなかった。

「別にいいわよ、今日はお父さんもお母さんも出かけているから」

「そうなのか」

俺は、お菓子を食べながら言った。

「お父さんは出張で、お母さんは同窓会に行っていて家に帰るのは明日の朝だって、今日の朝に言っていたのよ」

と中野は、俺の顔を見ながら言った。

「へえ、そうなんだ」

と言って俺は、袋の中に入っていた最後のお菓子を取ってそれを食べた。そして、お菓子を食べながら俺は中野の顔を見た。改めて中野を見ると、いつもとはまったく違う雰囲気を感じてしまう。いつもはポニーテールの髪型しか見せない中野の髪型が今、いつも束ねている髪の毛をほどこいて腰まで伸びている髪の毛がストレートに伸びている。そして、顔付きも学校で見ているいつも退屈そうで不機嫌そうな顔とは違い、にこやかでこの世を満喫していそうな顔をしていた。それほど家が落ち着く場所なのかと思った。ま、とにかく顔付きや髪型が変わったせいかは分からないが、中野が普段学校で放っている変人奇人な雰囲気とはまったく違う、別の雰囲気を感じてしまう。

「ほら、なにぼんやりとしているのよ。もうお菓子も食べたから勉強、始めるわよ」

中野は言いながら、机の上にあった空になったお菓子の袋をゴミ箱に捨てて、本棚から問題集やら教科書を持ってきて机の上に置いた。
「ああ、そうだな」

と小声で言って、俺はかばんから数学や英語の教科書やワークを取り出して机の上に広げて、期末テストに向けて勉強を始めた。

それからというもの、俺は真面目に勉強に取り組んだ。苦手教科の数学と英語を特にがんばった。この前の、中間テストではこの二教科だけがあと三点取っていなければ、今頃追試に向けて勉強しているだろう。だから、次の期末テストではそんなことがあってはいけないのだ。もしも、期末テストで赤点を取ったら俺の夏休みは地獄絵図に出てくる灼熱地獄のように暑い教室で補習を受けなければならぬ、しかもそれがほぼ毎日と続くのだから補習を受けている途中に、脱水症状と熱中症で倒れて保健室のベットの上で寝ているのが目に見えている。

「ほら、そのこの単語のスペル間違っているわよ」

「あれ、こうじゃなかったけ？」

「全然違うわよ、ここはこれじゃなくてこれよ」

中野は言いながら、赤ペンで俺が間違って書いていた単語を赤く潰してから、その下のところに正しい単語を書いた。

「そうか、そこが間違っていたのか」

「まったく、あんたもう一回中学やり直したらどう？ この問題、中学一年レベルの問題よ。それを間違えるなんて、あんた本当にバカ」

「バカで悪かったな」

「はあ……」

と中野は、呆れた顔をして溜息をつきながら勉強机の方を振り向いて机の上の置かれていた置時計を見た。

「もう、勉強を始めてからもう一時間かちよっただけ休憩しましょ

う」

「そうだな、少しだけ休もう。勉強し続けて肩のあたりが少し痛むし」

と言って俺は、右手に持っていたシャーペンを机の上に置いて、右手を左肩においた。

「……ねえ」

中野は、少し顔を赤くして恥ずかしそうに俺の顔をちらちらと見ながら言った。

「ん？」

「あんたさ、今、私のことをどう思っているの？」

「……はい？」

俺は、一瞬思考が停止した。まさかこんなことを聞かれるとは、まったく予想をしていなかった。

「だから、私のことをどう思っているか聞いているのよ」

「そ、そうだな……」

俺は、この質問をどう答えたらいいか分からなかった。

「ねえ、どう思っているの？」

と言いながら中野は、自分の顔を俺の顔に近づけて昭和の熱血刑事が取り調べ室で、犯人を自白まで追いつめているような感じで追求してきた。

「……」

俺は、何も言わないまま黙りこみ考えた。改めて、真剣に考えてみると俺は普段中野のことをどう思っているかは分からなかった。最初、初めて教室で中野を見たときは文学少女みたいなのと思っていたが、その予想を180度変えたどこかのアニメで言っていたような自己紹介を聞いてから俺は、アニメ好きの子だと思ったが、その後で中野と話して、あいつはただこの世を飽き飽きしていて何か面白いことがないかって教室の窓から見える外の景色を眺めて考えている。例えるのなら『涼宮ハルヒの憂鬱』に出てくるハルヒ的なポジションにあたる印象を感じた。

「それじゃ、逆に聞けど中野よ。お前は俺のことをどう思っているんだ？」

俺は中野に対して、質問返しという方法で自分が中野のことをどう思っているかの答えを考える時間を稼いだ。

「え！ それは……」

俺は真剣な目付きをして中野の顔を見ながら言った。まさか、逆に質問されるとは思っていなかったから中野は、動揺して顔を下に向けて黙り込んだ。それから数分間、俺たち二人はお互いの顔を見ながら黙っていた。そして中野は、今まで閉じていた口を小さく開けて聞こえるか聞こえないか分からないくらいの小声で

「……バ……カ……」

「なんだって？」

俺は、聞き取れなかったから中野がなんて言ったかもう一度聞いた。

「バカって言ったのよ！」

中野は、顔を真っ赤にして言った。

「え？」

俺は、呆氣にとられた顔をして言った。

「だから私は、あんたのことを人類史上とは言わないけど、私が今までに知ってきた人の中では、相当のバカね！ これほどのバカは生まれて初めて見たわ！」

「そうか……」

俺は苦笑いをしながら言った。そして、机の上に両手を置いて頭を天井の方に向けて天井を眺めた。この時俺は、目からこぼれそうな涙をなんとか流さないようにがんばっていた。まさか、どう思われているかという質問で『バカ』っていう言葉が出てくるなんてまったく思っていなかった。

「でも……」

と中野が斜め左下に顔を横に向けて、恥ずかしそうに俺の顔をちらちらと見ながら言った。

「……でも、私はそういうバカって嫌いじゃないわよ。バカって結

構、面白いし」

「中野……」

と言って俺は、中野の顔をいつも以上に目を大きくして見た。

「休憩はこれくらいにして、そろそろ勉強始めるわよ」

と言って中野は、パソコンが置かれている勉強机からシャーペンの芯が入っているケースを取って来て、さっきまで座っていたところに座って、勉強再開となった。

俺ののびのび人生を返せ?? (後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

俺ののびのび人生を返せXVIIII

休憩時の中野との会話から、数時間経っていた。その間、俺は必死に勉強した。数学の方程式は中野の助言を聞きつつ解いていた。英語は、単語のスペルをしょっちゅう間違えながら問題集にある日本語を英語に訳していった。そして、英語を日本語に訳していった。英語から日本語に訳すのは、簡単だったが日本語から英語に訳すのは結構難しかった。単語がなかなか思い出せずにその文章にあつていそうな単語を書いたが、そこは中野が赤いペンで線を引いて間違っているところを修正し説明した。俺はそれを真剣に聞いていた。俺は自分の夏休みのためにそして、俺はそんなにバカじゃないっていうことを証明してやるという新たな目標を抱き、手に力が入らないほど猛勉強した。

そして、数学・英語の問題集をすべて解き終わり俺がシャーペンを机の上に置いた時中野が

「これだけ、解けば何とか期末は乗り越えられるわね。あんた、私にこれだけプライベートの時間を削って教えたんだから頑張るなさいよ！」 赤点なんか取ったら罰金どころの話じゃないわよ！」

「ああ、分かっているさ。次の期末は、中間の数倍の点数を取ってやるさ」

と俺は高らかに、次の期末テストでは中間テストの点数より数倍の点数を取ると宣言したのであった。

「もうこんな時間だし、あんたそろそろ家に帰ったら？ 親御さんも心配しているだろうし」

と中野が言った後、俺はかばんから携帯電話を取り出して時計が表示されているところを見た。

「もう九時か、三時間も必死に勉強していたのか」

と俺は、シャーペンと消しゴムと問題集を筆箱やかばんに入れながら言った。

「そうよ」

中野は、さっきまで机の上に広げていた問題集や教科書を元の本棚に納めながら言った。

「それじゃ中野よ。俺はもう帰るわ」

俺は、かぼんを肩に下げて中野に言った。

「そう、それじゃ須崎駅まで一緒に付いて行ってあげるわ」

と言った後、中野は腰まで伸びている髪の毛を一つにまとめていつものポニーテールの髪型にしていた。

「中野よ」

「なに？」

中野は、髪の毛を束ねるのに使うヘアゴムを口に咥えたまま言った。
「別に、ポニーテールにしなくても今の髪型でも良いのに、どうしてくるのが面倒なポニーテールにするんだ？」

と俺は素朴な疑問を中野にぶつけた。

「別にいいじゃない、ポニーテールの方がなんか気持ち的に落ち着くのよ。それにこっちの方がかわいいし」

と中野は恥ずかしそうに言った。そして、口に咥えていたヘアゴムを右手に持って、一つにまとめていた髪の毛の束を縛った。

「そうか、でも俺はポニーテールじゃないロングヘアの髪型もかわいいなあと思ったけどな」

と俺は、ポニーテールじゃない中野の髪型を褒めたのであった。あのなめらかな髪の毛で風が吹いた時のゆらゆら揺れる髪はもうこの世にあるかないかっていう程美しかった。それに、中野のロングヘアの髪型はいつも学校で見ているポニーテールよりかわいかった。

「そうなんだ」

と中野は言った。そして、椅子に引掛けていた上着を着て中野は俺の横をポニーテールの髪の毛をゆらゆらと揺らして歩いて部屋のドアを開けて

「ほら、行くわよ」

と言って、中野は部屋から出て行った。

「待てよ」

と言って俺は、部屋から出て行ったのであった。部屋から出た後、一階に降りて玄関で靴を履いて外に出た。そして、自転車を停めていた場所に行った。

「あ！ やつと来た」

中野は俺が停めていた自転車の横に立っていた。

「遅く来て、悪かったな」

と言いながら俺は、かばんを自転車のかごに入れて自転車のスタンドを足で蹴り上げた。

「ほら、早く行くわよ」

と中野は言って、路地に出た。俺もその後に続くように自転車を押して路地に出た。

それからというもの、お互い何も喋らないまま須崎駅へと歩いて行った。そして、須崎駅の手前にある自動販売機の前を通った時、中野が

「ちょっと私、喉が渴いたから飲み物おごって」

と俺に言ってきた。ま、ここで俺の勉強に付き合ってくれたお礼として俺はお茶のペットボトル買って中野にあげたのであった。

「お前、財布持ってきてないのか？」

中野がペットボトルの蓋を開けて飲んでいる時に聞いた。

「……机の上に置いてきたのよ！ 上着の中に入れていると思っていたのに」

と言って、中野はまた飲みだして歩きだしたのであった。

「やれやれ」

小声で呟いて、中野の後を追ったのであった。

そして、須崎駅の前に着いて俺は自転車にまたがった。

「中野、今日はいろとありがとな」

と言った。

「え？ ……私は、ただ当然のことをしただけよ！ それよりもあんな気をつけて帰るのよ、事故なんかあったら今日の勉強が水の泡

になるんだからね」

「ああ分かってるさ。それじゃ、また明日な」

と言って俺は、自転車を漕ぎ始めて自宅へと帰ったのであった。

家に帰った後も、お風呂に入らずに自分の部屋に入って教科書にある問題や問題集の問題をノートに書いて勉強した。自分の夏休みを守るためにそして、俺がバカじゃないということを中野に証明するために汗背を流しながら猛勉強した。

それから三週間経ち、俺は教室で期末テストを受けていたのであった。一日目は数学と国語と地理で、二日目は理科と英語と保健体育でそして最終日の三日目は家庭科と音楽を受けたのであった。三週間の間、俺は中野や高野や泉や坂本に分からないところを教えるもらったりして、勉強した。

そして、期末テストが終わり俺の努力の結晶とも言える答案用紙の採点も終わりすべての答案用紙の返却が返却されたのであった。

「ねえ、テストの結果どうだった？」

中野が、身を乗り出して聞いてきた。

「……結果か、この三週間というものあんなに必死に勉強したのにまさか、あんな結果になるなんて……」

「あんた、まさか！」

と中野が、驚いた表情して言った。

「ああ、英語と数学と国語で百点取るなんて夢にも思っていなかったぜ」

「え？ あんた、なに言っているの？」

「だから、英語と数学と国語で百点取るなんて夢にも思っていなかったって言ったんだ。まさかテストで百点取るなんて思っていなかったよ。これもすべて、お前と高野と泉と泉のおかげだな、本当にありがとう」

と俺が、中野に感謝の気持ちを込めて頭を下げると中野は、顔全体を真っ赤に染めて

「別に感謝しなくても、私たちは当然のことをしただけよ！ それよりもあんた、私たちになんかおごりなさいよね。期末が近いなか私たちの勉強の時間を省いてあんたの勉強に付き合ったんだから」

「ああ、後日『ガスト』でなんかおごってやるつもりさ」

と俺が言うと、中野は少し笑って俺の顔を指差して

「約束だからね！」

中野は、笑顔で言った。

俺ののびのび人生を返せXVIIII（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。そして、次回で最終回になります。

俺ののびのび人生を返せXIX

後日、俺は約束通りに『ガスト』で4人の食事をおごってやったのであった。ご飯を食べ終わり今日の集いが解散となり俺が自宅へと帰っている時、バックに入れていた携帯電話の着信音が鳴り、俺は携帯を取り出して見た。携帯電話の画面を見ると、さっき別れたはずの中野からメールが届いていた。

「ちよっと今から、西崎公園まで来て」

という内容のメールが届いていた。

「分かった」

と返信をして、中野が待つ西崎公園に向ったのであった。

中野のメールを受け取って数分後、西崎公園に着いたのであった。公園に入ると、すぐ近くにあった古びた木でできたベンチに、顔を下に向けてうつむいていた中野が座っていた。

「あ！ やっと来た」

中野が俺の存在に気付いて、うつむいていた顔を上げて言った。

「待ったか？」

「待ってない」

と言いながら中野は、首を横に振った。

「そうか……それで中野よ、俺になにか用か？」

俺は、そう言いながら中野の横に座った。

「ちよっとね。……あのさ、あの質問覚えている？」

「あの質問？」

「ほら、あんたが私の家に来て勉強を教えていた時に、聞いたやつよ」

「……？」

俺にはさっぱり分からなかった。あの時で覚えているのは、中野が俺の耳元で鼓膜が破けそうな大声で間違っているところを指摘した事しか覚えていない。今でも、その声が頭の中で響いている。

「だから、私があんたに私のことをどう思っているかって聞いたじゃないのよ！ 忘れたの？」

「そんなこと、あったっけ？」

「はぁ……」

中野は呆れた顔をして、溜息をついた。

「それじゃ、改めて聞くわ。あんた、私のことどう思っているの？」
「……」

俺は黙りこんだ。どう、返答したらいいか分からなかった。

「ま、突然こんなことを聞いてすぐに答えられる訳ないか。じゃ、私のこと好きか嫌いって言ったらどっち？」

「え？」

「だから、私のこと好きか嫌いかって言ったらどっちなの？ 正直に答えてよ、嘘の答えは聞きたくないから」

といい、中野は俺の顔をいつもとは違う瞳で見えてきた。

「……好きだよ」

「え？ 今、なんて言った？」

「好きだって、言ったんだよ」

俺は、にこやかに微笑みながら言った。

「どうしてあんた、私のこと好きって思っているの？ 理由を教えてください？」

と中野は、理由を追求してきた。

「お前の、ぶっきらぼうな行動と外見とのギャップに惹かれたからさ」

「……ギャップに？」

「初めて学校で会った時、ぱっと見た時は、こいつはおとなしい奴かなと思っていたけど、でも、後からこいつは一体何をしたいのか全く分からない奴だなと思っていた。けど、そういう外見とお前がやった事とのギャップが、お前の魅力なんだっていうことに気付いたんだよ」

今、自分が中野のことをどう思っているかを堂々と言った。

「そうなんだ」

中野は、顔をさらに赤く染めて言った。

「それじゃ、今度は俺が逆に聞くけど、お前は俺のこと好きか嫌いかって言ったらどっちだ？」

「え？ そうね……私も好きだよ、あんたのこと」

と中野は、目をちらちらとさせながら言った。

「そうか。それじゃ、これが最後の質問だ。どうしてお前は、俺の事を好きなんだ？」

俺は、いつもとは違う真剣な目付きをして中野を見た。

今、中野は俺が言った『好き』という言葉聞いて、どう思っているかを聞いてみたくなった。

「……私は、あんたの性格ややる気のない感じを漂わせているオーラに惹かれたのよ」

そう言うとき中野は、ベンチから立ち上がり俺の前に来て

「勘違いしないでよね！ これは、そんなつもりないからね」

と中野が言った瞬間、中野の顔が俺の目の前に来て、中野は目を閉じて自分の唇をそっと俺の唇に重ねてきた。

俺はその瞬間、目を大きく開けて中野の顔を見ていた。まさか、こんなことをされるとはまったく思っていなかった。

数秒後、中野はゆっくりと唇を離した。

「それじゃ、また明日ね」

と言に残し、中野は近くに停めていた自分の自転車に乗って帰って行った。

中野が帰った後、俺はしばらくそのベンチに座って夜空にまばゆく輝く星を見ていた。

俺の『好き』という言葉聞いてどう思ったかということは聞けただけで、まさか、普段自分の気持ちを外に見せない中野が、突然とあんなことをしてくるとは思わなかった。あいつも少しずつだが、変わってきているなと思った。俺は家に帰ったのであった。

出 演

俺（主人公）

中野沙紀

泉あや

坂本美咲

高野拓実

久保

井上

山田教諭

中山良仁

その他生徒

演出・シナリオ

坂田銀時

2010年12月21日

俺ののびのび人生を返せ！製作委員会
オリジナル小説製作委員会

俺ののびのび人生を返せXIX（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の回をもちまして、「俺ののびのび人生を返せ！」を最終回とさせていただきます。今まで、ご覧いただき本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6302p/>

俺ののびのび人生を返せ！

2011年10月7日13時26分発行